

日本にとっての国際地理オリンピック参加の意義と課題

Significance and problems of the international geography Olympiad

井田 仁康 [1]

Yoshiyasu Ida[1]

[1] 筑波大・人間総合

[1] Education, Univ.of Tsukuba

世界的に各学問分野で、高校生をはじめ初等・中等教育での教育の重要性が認知され、高校生を対象とした国際オリンピックが開かれるようになった。本稿は、そのような世界的な潮流の中で、地理の国際オリンピックである国際地理オリンピックにおける、日本にとっての参加の意義と課題克服の方向性を明らかにすることを目的とする。

第1回の国際地理オリンピックは、1996年オランダのハーグで開催された。主管はIGU(国際地理学連合)のCGE(地理教育委員会)であり、国際的な地理教育の普及、地理を通しての国際交流などが目的とされた。第1回の参加国は、オランダ、ベルギー、ポーランド、スロベニア、ドイツのヨーロッパ5カ国であった。それ以降、国際地理オリンピックの開催は、4年に一度のIGC(国際地理学会議)とその間の4年ごとに開催されるRC(地理学地域会議)にあわせて開催されることになり、つまりは、2年ごとに開かれるようになった。2002年以降は、国際地理オリンピックのさらなる振興を図るために、

CGEとは独立してTF(地理オリンピック作業部会)が設置され、国際地理オリンピックの実行組織となった。

日本が国際地理オリンピックに初めて選手を派遣したのは第3回の韓国大会である。しかし、この大会での日本の参加は、全国的に組織して選手を派遣したわけではない。日本が国際地理オリンピックの参加を今まで躊躇していたのは、大きく3つの要因がある。すなわち、出題・解答とも英語であること、資金の確保、そして問題の難しさである。

一方で、日本が国際地理オリンピックに参加する意義としては、第1に日本における地理教育の活性化がある。国際地理オリンピックに日本が参加することで、地理の国際的スタンダードを考えることができ、それを日本からの世界に発信しやすくなるとともに、日本の教育界にも地理の存在をアピールできる。第2に、生徒・教員の交際交流が、地理を通して図れることである。英語での出題・解答は、翻していえば、参加者がすべて英語という共通言語をもち、直接、コミュニケーションが図れるという長所でもある。それにより、世界の多くの友人をもつことが可能で、世界へのネットワークが広がるのである。第3は、日本の世界貢献である。国際的な地理教育界からも日本の貢献は期待されている。国際地理オリンピックを通して、日本は地理教育のアジアのリーダー、世界のリーダーともなりえる。

このような意義のもと、日本のIGU分科会は、2007年に日本国際地理オリンピック日本委員会を立ち上げ、組織的に国際地理オリンピックに対応していくことになった。日本でも国内地理オリンピックを開催し、日本語と英語の問題を作成し、英語だけにやらない大会とした。成績優秀者のうち英語の点が高いものを国際地理オリンピックに派遣することとした。また、資金については地理関係の学会や個人から寄付を募る一方で、JSTにも資金補助を申請している。しかし、地理が「科学」でないという見識者もいて、交渉は続いている。参加費、企業との協力も含めて今後さらなる検討を要する。問題については、国際地理オリンピックに参加することで、国際スタンダードな教育が浸透することが期待できる。地理の問題では資料から、科学的な思考をふまえて、合理的判断や意思決定をもとめる出題も多い。今後、地理教育でも、このような思考を重視する傾向となろう。

国際地理オリンピックが2年に1度であったが、国際地理オリンピックが開かれない年には、2007年からアジア・太平洋地理オリンピックが開催されることになった。この地理オリンピックはTFの監修のもとで行われおり、ルールは国際地理オリンピックにほぼ則っている。そのため、国際地理オリンピックの一つとして位置づけていいだろう。第1回は台湾で開催され、この大会から日本も組織的に参加するようになった。第1回の参加国は、日本、メキシコ、マレーシア、台湾の4カ国にとどまったが、今後、参加国の増加は十分見込まれる。第2回の2009年のアジア太平洋地理オリンピックは、日本での開催が決まっている。なお、2008年に開催される第7回国際地理オリンピックは、チュニジアで開催されるが、日本はこの大会にも選手を送るべく準備をしている。日本の国際地理オリンピックへの参加は、まだ課題が解決されているわけではないが、まずは、参加し、実績を積み上げながら、改善していくという道を選択した。